

月刊

全国の家族と家族会をつなぐ機関誌
& 最新の精神保健福祉情報誌!!

2

2018

みんな ねっと

●特集

ひとりひとりの自尊心と思いを大切に

— 訪問看護ステーション「KAZOCC」の願い（訪問取材）

■事例からみる精神障害者の障害年金の実態（白石美佐子）連載11「病歴・就業状況等申立書の書き方」

■知ることとは生きること（青木聖久）連載26回

元航空会社のCAという側面を持つ私が今を一生懸命生きる

《自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集⑤》



読者のページ

みんなの
わ

「みんなのわ」は、読者のみなさんからの便りや投稿を中心に紹介するコーナーです。

「みんなねっと」の感想

◆愛知県 佐野久司 家族（年齢不詳）

10月号みんなねっと特集記事「当事者の地域生活の実現を目指す精神科病院」を拝読しました。

私は11年前に渡部先生の家族心理教育に参加して病氣の本質を学び、私を含む社会一般の認識不足を痛感した一人です。

病院内での研修会でしたの

で、治療行為の一環として行われているものと思っていました。が、どうも先生の個人的なご厚意による学習会であることを後に知りました。

そのため家族を対象とした6回シリーズの家族心理教育は、当事者・家族にとつては有用でも病院経営としては負担だけで医療ポイントにはなっていないようです（毎回参加者は10〜20家族）。

この11年間で先生が、名古屋の病院から八王子の病院へ、さらに稲沢の病院を経て長岡の田宮病院へと転院された経緯は患者・家族にとって有用の治療方法でも病院経営には有用ではなかったからだと思います。

今も田宮病院には長岡市以外の全国から患者と家族が心理教育に通っていることと推測しますがおそらく無料での教育研修

になっていないのではいでしょうか。

患者心理教育も教育入院期間（およそ2か月間）を過ぎると地域に戻ります。

精神障害者の治療方針が、入院から地域医療へと向かい、社会で受け入れる方向にかじ取りを変えていく中、田宮病院と同じような志を持った病院が全国に広がることを願います。

まずは一番身近な病院と家族の意識を変えていくことが当事者回復の近道だと確信しています。

そのためには家族心理教育を医療行為と認めていただき、患者と家族が病気を学び多くの患者を安心してサポートすることが大事だと痛感します。

何処にその声を届けたらよいのでしょうか。